

終戦後五十年を顧みて私の体験記

愛知県 神 間 八重子

昭和二十年八月十五日、この日、私は満州国新京（長春）から三人の幼児を連れ、夫の応召後、留守家族として疎開団に加わり、北朝鮮の平安北道博川ハクビシという未知のこの村に、連れてこられました。着いた翌日終戦という悲しい現実遭遇了しました。

あれから五十年という歳月を経て、私も七十七歳の老女になりました。苦しみ、悲しみ、つらいことなど到底忘れられるものではありません。

結婚しましたが、昭和十四年三月十九日でした。一月早々に見合いを、三月には結婚式、国宝建造物の建築技師として彼は将来を有望視されていました。当時、世の中はまだまだ平和のように思えましたが、女学校時代に満州の兵隊さんあての作文やら、慰問文を書いた記憶もあります。実家が名古屋のため、式は神

前結婚で名古屋で挙げました。

当時、担当の古社寺の工事現場は長野県の寂しい静かな山奥で、一変して田舎の生活、今のように各家庭に電話などあるはずもなく、随分寂しい思いもしました。しかし、田舎でなくては味えない温かい人の情け、お漬物でお茶をいただいたり、蚕の体がすき通つてくるとワラの中へ入れて、繭作りのお手伝いなど初めての経験をしました。

翌、十五年二月十一日の紀元節に長女誕生、名前も紀元節にちなんで主人の名前をとり、由紀子と名付けました。初めての子とて実家の名古屋で出産。紀元二千六百年の二月十一日のめでたい日に生まれた子供に市からお祝いが出るとか伺っていましたが、現場の長野県へ早々に帰りましたせいか、お祝いはいただけなかったことを覚えています。当時「天地輝く日本の……紀元は二千六百年……」と、国は挙げて二千六百年の元氣な歌が流れていたのを覚えています。

一つの現場工事が竣工すると、次の現場へと転居、子供がなければそんな生活も楽しいのかもしれない

が、私自身、国鉄マンの父を親に持ち、小学校を何度も転校した、あまり嬉しくもない経験をしていますだけに、夫には文部省を辞めてもらい、無理に頼んで、当時、名古屋市役所兵事防衛課へ転職してもらおうことになりました。

戦争の雲行きも怪しくなり、古社寺建築の仕事とは全く別の防火改修工事事務所が設けられ、町の繁華街に焼夷弾が落ちた場合、その火災を広げられないよう防壁を作るといふ、現場監督の仕事だったのでしようか。今はその主人もこの世にいませんので、聞く術もありませんが、転職によって主人の仕事に対する情熱は冷えていたかもしれません。私は自分の若さゆえと子供のことばかりで、主人に対する思いやりが欠けていたようにも思います。

もうこのとき、第二子、長男慶之助が誕生していました。昭和十七年一月三十一日生まれです。すぐ翌月二月一日から衣料切符が発行され、肉屋などの店頭にも行列ができるようになりました。つい行列に加わり家に帰る時間が遅れ、赤ん坊を泣かせ過ぎて、病気に

させたにがい経験もありました。

そんな矢先、主人は満州国新京（長春）に在任の先輩から、皇帝陛下の宮殿造営に是非との誘いを受けました。どんなに嬉しくよろこんだことでしょう。しかし、このころから状況も変わり、出征軍人の数もふえ、職場の人手も少なく、彼の退職も簡単にきき届けられず、それが原因か胃腸障害のため尋麻疹に悩まされ休職することになりました。

昭和十六年の十二月八日真珠湾攻撃の重大ニュースは勝川で親子四人揃った朝餉あさけの時、ラジオでききました。

幸い役所の方も円満解決、翌十八年一月早々、実家の母の心配をよそに、親子四人厳寒の満州国新京へと希望に胸をふくらませ出発しました。

寒い新京ではありましたが、さすが皇帝陛下の国都、立派な都会でした。ホテルで二、三泊し、荷物も運びこまれた私たちの住む家は、今でいうこちらの団地住まいです。あの当時にもうハイカラな団地の建物があったのですね。大きなポイラー室から石炭が焚かれ、

各部屋のチームに暖房が入ります。夢のようでした。今のよう冷蔵庫なんてない時代でしたが、各部屋の窓は二重窓になっていて、冷蔵庫の役目を果たしてくれます。

楽しい夢のような一年でしたが、戦争も日増しに激しくなり、とうとう皇帝陛下の宮殿造営は見合わせということ、戦没者の御霊をまつる忠霊塔の建設に切り替えられました。

三人目の子供がお腹に宿り、八カ月に入ったころ、とうとう主人にも運命の赤紙がまいりました。かねて覚悟はしていたものの、やはり心細くてたまりませんでした。

昭和十九年三月十日、主人はなるべく目立たないようにとのことで、御近所のあいさつもそこそこに孫家の部隊に入隊しました。その後、あるじ不在の寂しい中で六月三日、第三子次女出産、主人はいなくとも美しく恵まれるようにと「美恵子」と名付けました。

一目父親に会わせてやりたいの一心で次女を背に、二人の子供を連れ、当時、琿春にいた主人の部隊を

友達と訪ね、部隊長の御厚意で面会を許され、一泊の外泊をいただきました。さて翌日別れるとき、長女の由紀子は主人から離れようとしません。大声で泣かれたのには本当に困りました。

私どもの周辺の方にも赤紙を手にする人がだんだんふえてきました。とうとう勤務先の国務院建築局から連絡がきて、新京もいつ爆破されるやもしれず、私ども留守家族の身を案じて、直ちに身の回りを整理して疎開に参加するようにとの指示あり。あまりにも急のことと、あいにく三人とも、揃ってハシカの最中、それかといって残留するのも心細く、早々に簡単な身の回り品に防空服装を整え、家はそのまま玄関に鍵をかけ、新京駅へと集合しました。昭和二十年八月十三日でした。

さて、当日の新京駅は大混雑、発疹のため、顔を真っ赤にして切なそうな三人の我が子、もし、道中で万一のこともあつたらと不吉な考えも浮かびました。乗せられた汽車は石炭を運ぶときの無蓋車の連結車でした。

真夏の熱い太陽を浴びながら、すし詰め状態で走り出しました。私のすぐ隣にはまだ生まれて三日目という赤ちゃんが、ヘソの緒もついたまま真っ裸で、真っ赤な顔をして泣いていたのが印象的でした。ハシカをよそのお子さんにうつしてはと、隅で小さく寄りそっていた私たちでした。

いくつもの長い長いトンネルを通る度に、石炭の煙にむせて苦しく、もしか私たちはこのまま殺されるのではないかとも思いました。水筒の水をタオルにしみ込ませ、これを口にあてるようにと言っても、小さな子供たちには納得できず、泣いたりわめいたりしました。

汽車はどんどん北へ走りました。行く先も告げられぬままに、十四日、夕方近くやつと貨車から降りたその所は、北朝鮮平安北道博川^{はくせん}という村でした。地元の日本人の方々からおにぎりをいただき慰められました。その夜は日本人小学校の廊下、教室でそのままの格好で一夜を明かしました。

翌日、お昼前各班長が呼び出され、ただ今から重大

放送があるから、ということ、私どもはそのまま何事だろうと待っていました。

恐れ多くもただ今、玉音放送にて、敗戦を告げられました、と……。

予期しなかった報告でした。生まれてからこの方、日本が戦争に負けたなんて聞いたこともありません。

うそだ、デマだ、そんな馬鹿なことがと皆口々に大声で叫んで泣きました。班長にいましめられ一応落ち着きました。さて、敗戦となると日本は負けたのだから、ここは朝鮮の他国で、今夜にも襲われたら裏山にでも逃げるようにと、そんな指示まで受けました。

北朝鮮の赤衛隊という日本の兵隊の服装で、皮の長靴を履き、日本刀を下げた将校らしき人が靴のままツカツカと教室に入ってきて、お前たち日本は負けたのだぞ。悔しくないのか。今日から勝手に外出することは許さないからと厳しく言われました。私どもが寝泊まりしていた小学校も早速、朝鮮の小学校として使用されるため、米の倉庫へ移るようにとの命令に従いました。北朝鮮は真冬になると零下二〇度、三〇度は当たり前

前と聞いていました。これから冬に向かつてどうなることでしょうか、と不安でした。

三人の子供たちとどんなことがあっても無事に内地に帰るまでは死なせないぞ、頑張るんだと何度も自分自身に言い聞かせました。

団体生活の中では、食物を得るための醜い争いも嫌なほど見たり経験もしました。朝鮮の人が皆悪いとは申しませんが、私たち避難民に向かつて子供たちが日本人のトケツピー（お化け）、戦争に負けて悔しいだろう、と私たちに石を投げました。班長から「我慢するのだ。相手になるな」と注意され、日本の神社もあの当時、あちこち火をつけて焼かれました。「神様に火なんかつけたら罰が当たるよね」と子供たちはそんなことを言っていました。

たまたま勝手に外出した人が見つかって、皆の前に四、五人引つ張り出され座らせられて、日本刀を入れた鞆ごと将校らしき人からなぐられ、今度は交代して班長に命じて叩かせました。

一行が帰った後、班長はなぐった人の前に土下座し

て「命令だから仕方なくなぐったけれど、痛くないようになぐった積もりだ許してくれ」と、そんな場面も私たちは同胞の立場として泣きながら見ました。戦争とは何と醜く悲しいものでしょう。こんな悲しくもつらい毎日、乞食のような生活、耐える生活、人との交わり、苦しい生活を体験したお陰で私は自分なりに、成長したと自負しています。

風呂にも入らないので、シラミとの付き合い生活、食事も満足にとれないため、もちろん母乳の出るはずもなく、乳幼児は栄養失調でバタバタと死にました。最初は骨にでももらえました。日が立つにつれ焼く油もないと土葬にされました。大人も子供もカマスに入られ、男の人が天ビン棒でかついで山に埋めに行きました。翌日、ほかの死体を持って行くと、野犬がそれをあばいているのです。「私には子供の骨がなぜないの」と大声で泣きわめいていた若い母親、だれが悪いのでもありません。一体だれを責められましょうか。

集団の食事も大変でした。大釜に炊いた水のような雑炊、量をふやすための野草採りにも参加、飯^{べん}上げの

号令が出てもだれ一人器を持ってもらいに行こうと
しません。早くもらえば上の方は薄く、水のようなので、
後から遅くいただきに行けば少し濃いからです。交代
に遅番早番が決められました。人間窮地に追い込まれ
ると食べるということはこんなに人を醜くさらけ出す
ものかと、本当に悲しく思いました。

冬の使役も大変でした。男性は便所の肥汲み、桶に
汲んだものがすぐ凍ってしまうのです。体の丈夫な者
は男女を問わず、寒さのためにすっかり結氷した大き
な川の氷の上をすべって転ばないようにと、向こう岸
からこちらの岸まで砂利運びをします。空腹と寒さの
ために何度倒れそうになったことでしょう。

田植えもしました。都会育ちの私に田植えの経験の
あるはずもなく、勇気を出して参加し、隣に並んだ経
験のある方から「私のやるのを真似してついてくれれば
よいのよ」と教えてもらったが、指や腰が痛くなった
のを覚えています。手伝った後、五合か一升ほどの米
をいただくとお腹を空かして待つている子供
たちに、せめてもの濃い日のお粥を炊いてやったこと

もありました。

米倉庫の生活にも大分慣れ出したころ、ある日、突
如、ソ連兵がやってきて「ダワイ、ダワイ、女を出
せ」と。そんなときは、幼児のお尻をつねって思い切
り赤ちゃんを泣かせると、子供の泣き声はとても嫌が
って帰って行くのですが、そう度々泣かすこともでき
ません。たまたま集団の中に客商売のお店の方が四、
五人おられ、奉仕していただいたお陰で、私どもは難
をのがれ助かり感謝しました。

ある日、いつもの通り、使役から帰られたその方た
ちがお酒が入っていたせいか、「私たちがどんな気持
ちであなたたちの代わりになってソ連兵に接してい
るのかわかりますか」と半分泣きながらわめくように言
われたこともまだはつきり覚えていています。あの方たち
のお陰で私たちは助かったのだと思っています。ソ連
兵の言った大きな機関車がやってきて、「お前たち日
本人の避難民を近いうちに皆日本に返してやるから待
っている」と、私たちを喜ばせ、嬉し泣きさせたその
ことは、実現せず嘘でした。

いよいよ真冬になってしまい、米倉庫の周りのトタンも手をふれただけで指がくつついてしまう。そんな現状の中、博川在留の日本人宅を数カ所明け渡していただき、各々分散して二、三十人ぐらいつ泊まることになりました。もちろん夜具なんてなく、各自家を出る時持って出た急場凌ぎの、オーバー、毛布などその上からカマスを開いたムシロを布団代わりにかけ、体の悪い人は畳の部屋で、健康な人は土間で寝る。もちろん、私は健康でしたから、土間で子供三人をしつかり両脇にはさんでくつついて寝ました。道路を歩く人の足音、履き物の音がそのまま頭にピンピンと響き、寝ている人をまたいでいくという、そんな失礼なことでも平気でさせる状態でした。

長い長い一年間、何度空を仰いで鳥になって日本まで帰れたら、と。日本は一体どうなっているかしら、だれも知る人も教えてくれる人もいませんでした。故郷恋しく、親恋しさの毎日でした。フツと出征した主人も一体どこで何をしているのか、もしか、戦死でもしてもうこの世にはいないかもしれないと考えたこと

もありました。

寒い冬も過ぎてやがて一年を迎えようとするとき、いつまでも博川の方々に御迷惑をかけてもと、少しでも日本に近い方へ歩き始めたらどうかという声もきかれ、いよいよ実行することになりました。冷たい北鮮の人たちと思い込んでいたなかにも、「私たち日本にいたとき、とても日本の方によくしてもらったのに、何もして上げられなくてごめんさい」と謝ってくれた人もありました。当局の目もあつたことなのでしよう。

一番下の娘だけでも私にくれなにか、面倒見上げるから置いて行きなさいと言ってくれた人もありました。瞬間、私の頭にも迷いがよぎりました。この栄養失調のお荷物的美恵子もしいなければ…と、しかし、きつぱりと断りました。美恵子を胸に、両手に四歳の長男、六歳の長女の手を引いて団の一番ピリツコについて出発しました。博川から新幕まで汽車に乗ったように覚えています。さすが、新幕からの道のりはすっかり弱っている私どもにとって本当に険しい道でした。

大体平均一日に二十キロは歩かねばなりません。途中、朝鮮の見張番に銃をつきつけられ、「お前たちはどこへ行くのか。日本は戦争に負けて焼け野原だぞ。そんな所へ帰ってどうするつもりか」と、「私たちは例え焼け野原でも、日本に少しでも近い所で死ねたら本望ですから通してください」と頼みました。

日中はできるだけ歩き、夜になれば民家の軒下で仮眠し、歩く道中には雨上がりの濁流の大きな川もありました。大人だつて危ないのに、四、五歳の子供たちがどうして渡れましょう。地元の朝鮮人の男性が子供たちを肩車にのせ先に渡り、向こう岸に届けてくれ、泳ぎのできない私たちの手を引つ張つて助けてくれました。親切な朝鮮の方が協力してくださつたお陰で命拾いをしました。集団で歩くのですから人目につきま

す。人の目を避けるために、山道だの裏道だの遠回りをして見張番に見つけられ、叱られました。それではと堂々と表道を歩くことになりました。

新幕から開城まで出発してから四、五日もたつたでしょうか。

夜目にもはつきりと白線が引かれている三十八度線の国境線に出たとたんに、看視兵に銃を向けられました。せっかく、ここまで一生懸命歩いてきたのにここで殺されるのかと、あきらめと死ぬ覚悟はできておりました。

団長さんとの交渉の結果、通行の許可が下りたとき、皆、一斉に抱き合つて声を上げて泣きました。団長さんも涙声で「この小さな子供たちに大きくなつたら今日の思い出を大切に、話し聞かせてしつかりと育ててください」と、後は涙で声になりませんでした。

南鮮に入つてからはアメリカ軍の支配下でテント村に入り、厳しい消毒検査などあり、頭からシャツの中間まで地肌に直接DDTを真っ白に噴霧器でかけられました。万一、団の中から一人でも疑わしい病気の者が出れば全員足止めで、そこを離れることはできません。今更ここまできてと不安な念も幸い消され、全員OKということで釜山より興安丸に乗船、佐世保に上陸。

やっと懐かしい本国の土を踏むことができました。上陸間際に流れた私たちを迎えてくれた「誰か故郷を思

わざる」の懐かしい歌は後から後から止めどもなく流れる涙をどうしようもありませんでした。日本を離れてから三年ぶりに帰国しました。

昭和二十一年八月十二日でした。名古屋の実家も空襲で焼けたと聞いていたので、中央本線に乗り換え高蔵寺駅下車、近くに母がいる住居を訪ねました。夜中、突然玄関先に訪れた乞食同様の親子四人連れの我が娘、孫たちに幽霊かと腰を抜かささんばかりにびっくりしていました。

親の元ならばと安心して訪ねた場所でしたが、いったん他家に嫁いだ私の落ち着く場所ではありませんでした。それに北支で部隊長をしていて戦死かと思われていた弟が一足先に帰っていて、母の気持ちは弟の方へ（その弟も病死・次の弟は学徒出陣で戦死）。

でも、さすがに親として万一、私が未亡人になったときの生活に困らないように技術を身につけるべきと、美容学校へ行くことを勧められ援助をしてくれました。三カ月の速成科でしたが夢中で勉強しました。その間、胸に抱いて連れて帰った栄養失調の美恵子は私が学校

へ行っているうちに、母に看取られ旅立ちました。かわいそうな美恵子でした。

悲しみに落ち込んでいる暇もなく、国家試験に挑戦、合格し免状を手にしました。免状をもらったからとて直ぐに店を持てる訳でもなく、主人の復員を待つ間、子供は親戚に預け、私は美容院、製糸工場内の寮母のお手伝い、寄宿舎、食堂内のお手伝いとひたすら主人の帰りを待ちわびながら、懸命に働きました。手があれば寄宿舎の女工さんたちの髪を結ったり、長いような短いような二年でした。

昭和二十三年八月に、やっと新聞の復員名簿欄に主人の名前を見付け、名古屋駅へとんで行きました。最後になっても顔も見えず、尋ねたところ、舞鶴の病院に重患者として残っているとのこと、直ぐに舞鶴まで出掛けました。見るからにやせ衰え哀れな様子でしたが、ああ、生きていてくれてよかったですと思いました。終戦後、シベリアに抑留され腸閉塞のため、腸を一メートル半ばかり切断、その先が下腹に出ている状態で、いったんは死体と一緒に運ばれたものの、まだ息があ

ったから助け出されたとのこと。医師は危険で転院は難しいと言われましたが、無理に頼んで名古屋の国立病院へ、しかし、当時よい薬が無かったのか寿命だったのでしょうか、せつかく内地まで保つてきた命を二週間ばかりの入院で、最後は悔しい残念だといいながら、涙が二、三筋頬を伝い、昭和二十三年八月十九日息を引き取りました。

とたんに、生きる希望もなくなった私はもう何もかもいやになり、家の近くを走る中央本線の列車音がけて親子もろ共、とび込もうと思つたこともありました。

この度の戦争でたくさんの子供が孤児となり、その子供たちのせめて母親代わりに施設でも入つてとの思いもありましたが、一周忌を迎えるころには気持ちも落ち着き、母親の説得も素直に受け再婚を考えました。

第二の出発、昭和二十四年十月四日でした。再婚相手は四人の子供を抱え、その年に病弱な妻を亡くしたばかりの四十二歳の男性、私は三十一歳、同じ引揚者同志なら同じ痛みも分かち合えて、零からのスタートも絶対協力してやれるのではないかと決心しました。

彼には中二の長女を頭に、小学一年生の長男、腕白坊やの五歳の次男、引き揚げてから生まれた一年半の病弱な三男、私には引揚げの関係で一年遅れて入学した小学三年の長女と、小学二年の長男を連れ、途端に六人の母親となり、世帯をもつたのは彼のいる引揚者の寮でした。私の第二の出発は決して快い周辺ではありませんでした。

当時、主食のお米は配給制で、さつまいもすら主食代わりの配給の時代でした。発育盛りの子供たちに何としても食物だけはお腹いっぱい食べさせてやりたいの一心で、私は母の元までバスにのり、折れたウドンや食料の無心に通いました。北鮮の避難民時代を思えば、何だこれぐらいのことに負けてたまるか、頑張るぞと負けん気の根性を持ち続けました。

中三の長女に対して実家の母は年頃ゆえに、思春期の感情に走り易い年だからほかの子供たちより一層心くばりをするようにと、案じてくれました。私はこの四人の子供たちにとって確かに生みの親ではありません。義理の母、世間ではもう一つ嫌な名前前の継母とも

いわれます。自分がお腹を痛めて生んだからかわいい、生まないから憎いとそんな差別ができるものでしょうか。もし、私が逆に我が子を残して旅立つたら、やはりどなたかのお世話にならなければなりません。私は絶対に継子いじめはしないと神に誓いましたが、難しいことです。

寮の共同生活は本当に嫌でした。ズラリと並んだ各家庭のコンロ、あの当時ですから、ぜいたくな御馳走なんて、もちろんできませんでしたが、今夜のお惣菜は？なんて一目で分かりますものね。

息苦しいような寮生活からやっと解放され、役所の方の配慮で町中から郊外の市営住宅へと引っ越し、狭いながらもやっと家族水入らずの生活が始まりました。主人は大学は英文科卒、昭和七年に渡満し、現地で郵政局長の娘と結婚、宮口、奉天税関に勤務、終戦當時は原麻統制組合奉天本部に在職、終戦のため、組合解散後、一年後の昭和二十一年七月に私と前後して、彼は妻、子供三人を連れ舞鶴へ上陸。満州生まれの体の弱い彼女が生まれて初めて自分の祖国、敗戦の日本

の土地を踏んだ印象はどうだったでしょうか。お気の毒に引揚寮で三男を生み、彼女は一年半後亡くなりました。

再婚後の彼は英語のできるのを幸いに、駐留軍の通訳として、解散するまで勤務しました。このころ、我が荒家^{あらいや}へ駐留軍の軍曹だの兵隊たちがジープで乗りつけ、主人のことを「パパさん、パパさん」と片言の日本語で、我が家の子供たちに「コカコーラ、チョコレート、ガム」などをくれました。

冬になりクリスマス近くになると、兵隊の故郷のアメリカから母親の編んだ暖かい手袋が、子供の数だけ入っていて、それに中古ではありましたが、衣料もそえてダンボールいっぱい、送ってくれました。衣料も十分ないそのころ、私は本当に嬉しくて早速、日本語でお礼の手紙を書き、主人がそれを英訳して送りしました。今ごろ、あの当時の兵隊さんたちはどうしていることでしょうか。

発育盛り、子育て、学校のPTAの役員など、毎日、本当に目まぐるしく働きました。主人の給料ではこの

大家族の生計費、教育費も苦しく内職にも没頭しました（瀬戸は粘土の内職仕事がありました）。慣れない手付きでなかなか形もうまくできませんでしたが、だんだん上手になりました。不器用な主人さえ見るに見かねて練習して手伝ってくれました。生さぬ仲ゆえの心くばりも通じないで、一人悲しい思いをしたこともしばしば、そんなとき、周囲の良き友に支えられ、どれぐらい勇気づけられ励まされたことでしょう。

駐留軍解散後、職を失いましたが、縁あって住宅公団の専任管理人として採用され、名古屋にて、お陰様で住宅に不自由することなく、快適な団地生活をすることができました。

団地生活を始めて間もなくでした。再婚当時、まだ二歳足らずの末っ子の健治は私との関係を知る由もなく、小学校の三年生ぐらいになっていました。ある日の夕食時、いつもと違って機嫌悪く、問い正したところ、突然、「僕ってお母さんの本当の子でないの?」と聞かれびっくりしました。「だれがそんなこと言ったの?」「掃除のおばさんだよ」「それであなたはどう

思っているの?不平でもあるの?」「別に不平ではないけれど、おばさんがあんな言い方をしたから」と。

別に今まで無理に隠してきた積もりありません。

時期到来と初めて赤ちゃんから今日までのことを話しました。「死んでしまったもの仕方がないものね」それつきり母のことは申しませんでした。

その息子がやがて成人し、家庭を持ち二女の父親となつてから、ある日私に申しました。「僕を生んでくれた母親の顔は写真しか知らないけれど、育ててくれたのはこのおふくろさんだから、僕は本当のお母さんと思つているからね」と言ってくれました。その言葉を聞いたとき、私は思わず嬉しくつて涙がとまりませんでした。幼いとき、養子の話があつたこの子を手放さなくてよかつたと思つておりました。

主人は昭和三十三年から四十一年三月まで、公団に勤めました。まだ当時停年まで一年ありましたが、公団共済会の店舗で商売することを勧められ散々迷いました。素人の私たちに商売ができるかしら、引揚者である私どもは老後の年金は乏しく、よくよく考えた末

決断し、四十一年四月一日から団地内の店舗で文具、煙草店を始めました。慣れるまで大変でした。食事は交代で適当にとり、物の値段も十分分からず、お客様への応対には全く不向きな主人、対人関係には割と慣れていたので私ですが、商売となると難しいものです。二人三脚で頑張りました。

病弱でとても五、六歳までも生きられるかどうかと案じられていた三男の息子夫婦が、跡を引き継いで、自ら写真現像、焼き増しなどにも手を助け、やはり若さでしょうか。パート店員も交えて、現在も頑張つてやっています。

六人の子供たちもそれぞれに成長し、家庭を持ち孫十四人、曾孫二人、私ども老夫婦交えて我が家だけで三十人の大世帯になりました。

昨年は数え年で、喜びごとは早くした方がよいと、主人八十八歳の米寿を、私は七十七歳の喜寿を一緒に子供たちが祝ってくれました。

自ら選んでスタートした第二の人生も早、四十六年を迎えます。お陰様で大した病気にもならず、今日ま

で頑張ってきました。振り返ってみますと、長い長い道のりだったようにも思います。決して平坦な楽な道ではありませんでしたが、あの北鮮での生活がなかったら今日の私は、もうとつくにこの世から消えていたかもしれません。あの苦しい、つらい体験が私を支えてくれたと思います。

引き揚げた当初から、今日までいろいろと数多くの方々にお世話になりました。その分、少しでも何かお役に立てたらと、民生委員を引受けましたときにもそう思いました。年数ばかり立ったようにも思いますが、私は私なりにいろいろと勉強させていただきました。

民生委員として、昨年は二十五年勤続により県知事・市長賞をいただき、今年はまた思いがけない厚生大臣からの特別表彰の連絡をいただきました。役所の方から前もってお知らせいただき、晴れの六月九日に、私は区長さんからいただく伝達式に出席するのを楽しみにしていましたのに、突然思いがけない不幸が訪れました。

私が北鮮から幼子の手を引き、泣き泣き歩いて連れ

て帰った当時四歳だった長男が、五十三歳の働き盛りで突如倒れ、クモ膜下出血と診断され、物言わぬまま、別れの言葉もなく永遠の旅路に出かけてしまいました。

六月九日は息子の悲しい告別式の日でした。

【執筆者の横顔】

八重子さんは大正七年一月生まれ、兄弟姉妹は七人もいたが八重子さんは次女である。父親は国鉄職員で各職場を転々としていたが、父親が名古屋在勤中に八重子さんは小学校から高等女学校を昭和十年卒業し、三井物産名古屋支店に勤務していた。昭和十四年、結婚のため退社した。

主人は、国宝建造物の建築技師だったので古社寺の工事現場のある長野県下をめぐっていた。そんなある日、満州国で皇帝の宮殿を造営するので是非満州国政府にきてください、と誘いをうけていた。

昭和十八年一月、親子四人で渡満となった。

十九年三月十日、御主人に召集令状がきた。そのとき、八重子さんは三人目の子を宿し、八カ月だった。

二十年八月に入れば、新京はいつ爆破されるかしれないと疎開の指示をうけたので、新京駅は大混雑の中乗車し、八月十四日、北朝鮮の博川に降ろされた。翌十五日玉音放送を聞き、敗戦を告げられ、大声で叫んで泣いた。

世は逆転、朝鮮人は靴のまま部屋に入り、お前たちは、日本は負けたのだ。悔しくないか、今日から勝手に外の出入りは許さない、ときびしい。

風呂にも入れない。シラミはわく、食べるものもなく母乳はとまる。栄養失調で倒れて死者が出る避難生活である。博川から新幕まで汽車に乗り、降ろされて一日に二十キロも歩く。夜になれば民家の軒に仮眠する。雨上りの濁流の大河を肩車をして向こう岸に届け、泳ぎのできない八重子さんのような人の手を引っ張って助けてくれた親切な朝鮮人のおかげで命拾いをした。ついに、三十八度線の国境で看視兵に銃を向けられた。殺されても、と死ぬ覚悟はできていた。団長の交渉で通過の許可が下りたとき、皆一斉に抱き合って声をあげて泣いた。

南鮮に入り米軍支配下に入り、釜山から船で佐世保に上陸。昭和二十一年八月十二日に名古屋の母のいる家に着き、驚喜させた。

御主人の帰りを待つ。二十一年も、二十二年も生死不明のまま、二十三年八月、御主人がシベリア抑留から重患で舞鶴病院に復員しているとの通知をうけた八重子さんは、喜悅さわまつて舞鶴で対面。しかし、二週間後に息を引きとった。

二十四年十月、母親の説得もうけて、同じ大陸からの引揚者で妻を亡くした方と再婚した。中学二年の長女、小学一年の長男、五歳の次男、一歳半の三男の四人、それに八重子さんの小学三年の長女、小学二年の長男を連れて、とたんに六人の母親となった。

再婚した当時一歳半だった健治さんが、成長して、「育ててくれたのは、このおふくろさんだ。俺の本当のお母さんと思っっているからね」と言ってくれたときは、八重子さんは嬉し涙がとまらなかつたという。

(他)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

再び繰り返すまい

山形県 岩岡 キミコ

この八月十五日は、日本人にとって絶対忘れることのできない終戦の日である。

昭和二十年八月十五日、日本の敗戦、他国となつてしまつた北朝鮮で迎えた敗戦の事実、明日のいや、今日の生死すらわからない日々の暮らし、判断と決断を要する緊張の連続、住みなれた北朝鮮との決別、明日をも知れぬ我が身、家族の行方、毎日毎日、長い長い一日の連続だった。

私は朝鮮で骨を埋める覚悟だった。

大正十四年、小学校四年生の二学期、私はひと足先に渡鮮した父の後を追つて、母と二人玄界灘を船で渡つた。日本の統治国になつた朝鮮で暮らしたいと考えた父は、最初一年半余り南鮮にいたが、その後、北鮮の平壤で鉄道員として過ごすことになり、鮮鉄の職員